

1992年度日本気象学会奨励金受領候補者の募集

1970年より、日本気象学会は、研究費・研究環境に恵まれない会員の研究を奨励するために、「日本気象学会奨励金」制度を設けました。現在、毎年3件、1件7万円を贈与しています。3件のうち1件については小・中・高校の地学教育に従事されている先生で、特に実践的な気象研究を進められている個人またはグループを対象として贈与し、気象教育の振興を図る一助にしています。

本年度の奨励金の受領を希望する方、あるいは、推薦しようとする方は、申請の要項に基づき、下記の形式で応募あるいは推薦をして下さい。

なお、この募集は日本地学教育学会にも案内を出して頂く予定です。

1992年4月

日本気象学会理事長

記

締切：1992年6月5日（金）必着

送付先：〒100 東京都千代田区大手町 1-3-4

気象庁内日本気象学会事務局気付

奨励金選考委員会

用紙：B5版 横書き

記入要領

1. 応募者氏名（ふりがな付）、印、生年月日、勤務先、職名および連絡先（郵便番号、宛名）
2. 研究項目
3. 研究経過と今後の研究計画（あわせて400字詰原稿用紙4枚以内）
4. 受領応募者略歴
5. 推薦の場合は、推薦者氏名、印、勤務先及び職名、および推薦理由（400字詰原稿用紙4枚以内）（推薦の場合は応募者の印は不要）

注）共同研究の場合は、1件として応募者を連名で記すこと。

奨励金申請の要綱

1. 気象学、気象技術および気象教育の進歩に貢献しうる将来性、発展性のある研究は、すべて本奨励金の対象となる。完成度の高い研究であることは必要条件でない。
2. 受領者は原則として会員ですが、教育関係者については会員外の実務も受け付けます。
3. 大学あるいは研究機関に勤務し、経常あるいは特

別研究費の配分を受けて気象学の研究に従事する方は、原則として、対象から除外される。また、応募あるいは推薦研究題目について他機関から既に研究助成金を受けているものについても、原則として対象者から除外される。

4. 受領者の選定は、奨励金受領者選定規定に従って、理事長の委嘱する5名の選考委員によって行われる。
5. 今年度の贈呈は、10月7—9日、札幌で開催される秋季大会において行う。
6. 受領者は、奨励金受領後1カ年以内に簡潔な研究報告を理事長に提出する。

過去の受領者はつぎのとおりです

| 年度 | 受領者 | |
|------|-------|-------|
| 1970 | 長野美文 | 久保田効 |
| 1971 | 山川弘 | 竹内丑雄 |
| 1972 | 杉山清春 | 竹内新 |
| | 地迫良一 | 深津林 |
| | 清水喜允 | |
| 1973 | 加藤一靖 | 小岩清水 |
| | 村松照男 | |
| 1974 | 矢野兼三 | 内山文夫 |
| | 櫃間道夫 | |
| 1975 | 岸田和博 | 鈴木和史 |
| 1976 | 山田幹夫 | 力武恒雄 |
| | 松村三佐男 | |
| 1977 | 小形明 | 宮川和夫 |
| | 永沢義嗣 | 佐々木芳春 |
| 1978 | 島村泰正 | 伊豆味正吉 |
| | 春日信 | 浦野弘 |
| 1979 | 木村悠 | 坂上公平 |
| | 小柴厚 | |
| 1980 | 山中博 | 若原勝二 |
| | 中井公太 | 横山博 |
| 1981 | 細野正俊 | 西本洋相 |
| 1982 | 西田耕造 | 山内博行 |
| | 原嶋宏昌 | |
| 1983 | 田頭正広 | 渡部浩章 |
| | 鈴木欣也 | 丹英二 |
| | 長島真 | |
| 1984 | 平隆介 | 加藤敏彦 |

| 年度 | 受領者 | 1988 | 大野木 和 敏 銘 刈 眞 正 |
|------|---------------|------|-----------------|
| 1984 | 柴 山 元 彦 | | 金 城 勝 重 橋 本 雅 巳 |
| 1985 | 中 田 隆 一 水 野 量 | 1989 | 松 本 崇 司 松 田 耕 治 |
| | 名 越 利 幸 | | 塩 澤 定 道 有 賀 公 平 |
| 1986 | 大 奈 健 江 上 公 | | 西 銘 宜 正 |
| | 半 田 孝 瀧 島 幸 市 | 1990 | 横 田 寛 伸 松 村 哲 |
| 1987 | 入 田 央 三 品 博 | 1991 | 榎 野 泰 夫 浅 野 浅 春 |
| | 榑 原 保 志 | | 岡 田 哲 也 居 島 修 |



花岡 利昌 著
「伝統民家の生態学」

海青社 1991年6月初版
199頁 定価 2,600円

一風変わった名前の本である。「伝統民家」はなんとなくわかるような気もするが、その「生態学」とはなんだろう。著者の「まえがき」と「あとがき」でその意味を述べておられる。すなわち、「現在の住宅生産は次第に規格化され、その住宅を自然環境から隔絶して、専らエネルギーを使用することにより内部環境を調整する方向に力を注いでいる」「先人が、自然と対決するのではなく風土と調和して行く道を築いた生活の知恵を明らかにする意味であえて生態学なる言葉を使用した」とある。このことは今流に言えば「地球にやさしい家の構造を調査し、その住環境を明らかにする」と言うことになろうか。

花岡氏が取り上げている「伝統民家」は、大家族制で有名な岐阜県大野郡白川村の合掌造り、石川県石川郡白峰村の大壁造り、古墳時代の遺構を残すと言われている奄美諸島の中の離島に分棟民家、同じく登呂遺跡などから出土したのと似た構造を持つ奄美大島の高倉、当時の沖縄の貴族の住居を模したと言われている石垣島の宮良殿内、島根県の防風林つき屋敷、山形、新潟、滋賀三県の土座、アイヌ民族のチセなどなど国指定文化財を含め合計25家屋以上におよんでおり、氏の精力的な活動が偲ばれる。

方法論としては、気温、湿度、気流速度、放射などを必要に応じ連続記録をとったり、また定時での読み取り記録によったりそれぞれの家屋の特性、観測時の技術的問題によりそれぞれ適切な方法をとっている。これら一連の調査は数年で出来るものでなく、著者は約25年と述

べているがその期間中のこの方面の技術的進歩は目ざましく、著者の採用した方法もそれに従って近代的に変化してきているのは当然である。

しかし、先にも述べたような特徴ある伝統民家は現在ではえてして交通不便な僻地にあることが多く、輸送その他の問題からであろう、測定器の方も伝統的なものが多く使用されている。だからと言って、著者の考察は最新式の測器を使用した結果の考察に決して劣るものではない。興味ある一例を挙げよう。合掌造りの場合、一般に夏涼しくて春には暖かいと言われている。著者はその事を記録温度計を使用して事実であることを確かめ、さらに、ほぼ南北方向に統一されている棟の向きと屋根の急勾配とがあいまって、屋根の単位面積が一日の間に受ける日射量が夏に一年中で最も少なく、春と秋とに極大値を示すことを、実測と理論の両面から見事に実証している。

蛇足を加えたいのだが、この合掌造りの構造について著者は、「屋根の棟の方位が南北から大きく外れていたのは最近に観光用に移築したもの」と皮肉たっぷりに述べている。恐らく著者は「先人の知恵」を忘れてしまった、または気が付いていない現代人を哀れに思ったのに違いない。

合掌造りの他にも、伝統家屋と近代家屋との同時比較は、沖縄のかの有名な宮良殿内と最近に建造されたコンクリートブロック造りの民宿などについても行われ、興味ある結果を提供している。

この本は、図、表、写真が豊富なのも読者の理解を助けているし、資料集としての意義も認められる。住居気候の学徒はもとより、建築、保健、文化人類学その他広く地球に優しい環境に関心のある方々に一読をお奨めしたい。

(岡山大学教育学部 佐橋 謙)